

巻頭言

「あの時、見た」と「事実」

別府大学

学 長 豊 田 寛 三

長い生徒・学生時代で、先生方の授業や講義をたくさん受けてきた。しかし、これは私だけではないと思うが、名（迷）授業の味はほとんど記憶にない。しかし、先生が授業中に「余談」「裏話」「エピソード」として話されたことのいくつかは、何十年経っても不思議なことに記憶に残っているものがある。

私は、一応戦前の生まれではあるが、戦争の記憶はまったくない。ただ、同級生には外地からの引揚者や都会からの疎開者もいた。否、なによりも「父親が戦死した」という同級生が1クラス50人のなかに複数はいた。自分の一級上の従兄も父親の顔を知らないひとりだった。

大学時代の恩師からは、原爆被爆の話もお聞きした。当時女子専門学校に勤めており、工場への勤労働員の引率からその日の未明に帰宅し、床に就いてまもなくが原爆投下であった。夏のことで、蚊帳を吊っていた。原爆の爆風が蚊帳を吹き飛ばし、先生の体に巻きついた。後で、蚊帳を外すと、ガラスが一杯突き刺さっていたという。「僕は、蚊帳のお蔭で命拾いをしたんだよ」原爆後遺症に苦しんでおられた先生が淡々と話された言葉は、今も脳裏に焼きついており、声高な原爆反対のアピールよりも私の心を捉えている。それほどの強烈な印象は、「やはり、本物だから」「自分の体験だから」であろうと思っている。

父、新田次郎、母藤原ていの末っ子の一人娘であった藤原咲子さんの『母への詫び状』（山と溪谷社、2005年）のなかに、「知っているよ、私。お母ちゃんの背中中のリュックの中で見ていたのが、アレだよ」という一節がある。ここでいうアレは北極星である。

時は、昭和20年の終戦時、父の新田氏は当時満州中央気象台の研究員であったが、捕虜として抑留された。母のていさんは、5歳の長男、2歳の次男（後の藤原正彦）の手を引き、生まれたばかりの咲子さんを背負い、北緯38度線を越え、翌21年9月に日本に帰国した。この間の出来事をまとめたのが、藤原さんのベストセラー作品「流れる星は生きている」である。

赤ん坊の咲子さんは約10カ月の逃亡生活の間、泣き声はほとんど出さなかったという。大豆の入った袋の上に腰を折るように寝かされたリュックのなかから見た北極星について、咲子さんは、「誕生時に呼吸した最初の空気」だろうとしている。1歳に満たない赤ん坊に北極星は見えただろうか？

皆さんが生まれて最初に見た光景は何で、それを覚えているだろうか？同世代の一人として、これほどすさまじい原体験は聞いたことがない。しかし、これも自らの体験であるから語れるのであろう。誰も、それを否定することはできない。

話は、変わる。1995（平成7）年1月17日（火）、阪神淡路大地震の日である。当時、私は、学部の教務委員長をしており、14・15日のセンター入試を終え、ほっとした朝だった。5時半過ぎに起き、新聞を読みながらテレビを見ていた。すると、突然（5時46分）阪神地方の地震の報道があった。しばらくするとNHK神戸放送局からの映像となり、道路の状況が写されたが、平穏な通行に見えた。しかし、それからの報道は、被害の大きさが増すばかりであった。1時間目の講義を終えて、教務係に戻ると、大変な事になっていた。その後のことは、ここでは繰り返さない。この大震災は、日本、日本人にとって今回の東日本大震災の「原体験」として、これからも語り継がれるだろうし、そうでなくてはならないと、思っている。

ここで、自分の恥を言おう。震災以来10数年間、私は1月17日は月曜日（センター試験の翌日）と思っていたが、16日（月）は振り替え休日だったのだ。それを知ったのは、この文章を書こうと思って古い手帳をひっくり返した時だった。私は、センター試験終了の安堵感と、大震災のショックからか、1月16日は空白の1日だったのだ。「自分の経験だから、絶対に正しい。」とはいえない。事実の確認は大切なことと思う。

皆さんも、将来教壇に立った時の「余談」を語るときの「他山の石」としてほしい。